

優秀賞受賞作品

モンちゃんのだん生日

山田 幸子
岐阜県岐阜市立長良小学校 三年
指導者 下野 和男

「わあ！モンシロチョウのたまごってこんなに小さいの。こんな小さいたまごが、本当にモンシロチョウになれるのだろうか。」
私は、はじめてモンシロチョウのたまごを見た時は、びっくりしました。

五月の理科の時間に、先生が「みんなモンシロチョウのたまごを、せい虫になるまでかんさつしてみないかね。」と言われました。私は、心の中で（今まで、一つの目ひょうにむかつてやりとげたことがないので、やってみたいなあ）と思い「はい。」と手をあげました。みんなも、虫にきょうみがあるのかさんせいのしたので、学級全いでとりくむことになりました。

かんさつがはじまると、学校への行き帰りが、いつもとかわってきました。朝学校へ行く時は、（ちょうちょになっていくかなあ）とたのしくなります。名前も、モンちゃんをつけてやりました。

しかし、かんさつをつづけていると、楽しいことばかりでなく、いやなこともありました。たまごから幼虫になると、キャベツをもりもり食べ、くいしんぼうのモンちゃんになりました。たまごのうちは、はりきってかんさつをしていましたが、幼虫になると、でっかいふんをするようになり、カップの中がくさくてたまりません。（くさいなあ）とはなをつまんでキャベツをかえてやりました。かんさつをすることが、だんだんいやになってきました。（ここであきらめては、先生とやくそくした、ねばりむしがつかめないからいかん）と思いました。

「あつ、さなぎになっている。」
六月二十三日。ちょうど幼虫になって十一日目のことでした。モンちゃんが、さなぎにへんしんしていました。さなぎにさわってみると、おしりの方がピクピクとうごきました。私は、さなぎがうごくとはしらなかったのびつくりしました。

学校から帰って行く時も、（家ぞくのみんなに、どうしてこのことを話してやろう。今度は、何日ぐらいにちょうちょになるのかなあ）と考えながら、楽しく帰りました。

夕食の時間に、今日のできごとを、みんなに話しました。おとうさんやおかあさんは、「がんばってかんさつするんだぞ。あきらめちゃあかんぞ。」
とにっこりしてはげましてくれました。おばあちゃんも、横のカレンダーを見て、「一、二、三……えっと、あと八日で幸ちゃんのたん生日だよ。モンちゃんのたん生日と同じかもしれないよ。」
とゆびをおって言いました。それを聞いたお兄ちゃんも、へんな顔して、「さつちは小さいから、ちょうちょも小さいかもしれないよ。」
と言ったので、むねがドキッと思いました。

優秀賞受賞作品

私の中のヒーロー

岡山大学教育学部附属中学校 三年
指導者 亀高 嘉彦

「あんなって人、よく分かんないけど、何となく。」
それつきり彼女は黙ってしまつて、気まずい雰囲気のまま、私達は歩いた。中三になったばかりの頃のことである。

その時、私は知っていたのだ。彼女が私の中の何を見抜いていたかを。それは、私がずっと心の中で育てて来たものののだ。

朝起きる。階段を下りて行くと、家族がいる。学校へ行く。友達がいる。家へ帰る。家族が待っている。私はいつも誰かに囲まれていた。けれど、いつも寂しさを感じていた。それは大きくなるにつれて、強くなった。多くの友達とワイワイ遊んでいる時に、フツと一人だけ取り残されたような気分になることも、度々あった。何か一つ、私の心の中に、小さなかけらではあるけれど、欠けていたものがあつたことは確かだ。それが何なのか、私にはずっと分からなかった。

私は昔から、自分の感情を押し殺すのがうまかつた。小さい頃から何か仕事があると責任ある役に就き、「クラスの人気者」と周りから言われながら育ってきた。だから、多くの人と仲良くしていなければならなかった。そのためには、ある程度自分を押さえないといけないのだ。そうしないと、人と衝突して、私は「人気者」の座から滑り落ちてしまう。それがたまらなく怖くて、私はいつも他人に同調していた。たとえば、心の中で「こんなことしてちゃいけないんだ。」と思つていても、口に出すことができない。まるでヒーローのように、笑つて、おどけて……。私の笑い、友達に、
「あんなって人、よく分かんないなあ。」
と言われた時、そんなヒーローの私を見抜かれたように、心臓がきゅつと締めつけられたよ

選評

まだ言葉の話せない武範君の思いを、その動作から読み取ってしまふところがよくわかります。武範君の愛情の深さがよくわかります。武範君の思いの強さが、いきいきと伝わってくる作品です。

「体は小さくてもじょうぶいからいいですよ。」とお兄ちゃんに言いかえしてやりました。さなぎになってからも、毎日カップをのぞきました。だんだん緑から茶色にかわつてきました。はねの毛もよく見えてきました。「もうすぐ、羽化するよ。もうが見えるも」と杉本君が教えてくれました。

六月三十日、私のたん生日の日でした。家ぞくのみんなが「おめでとう。」と言つてくれました。私も、いい気分です。学校へ行くとき、カップの中をモンちゃんがとんでいました。「やったあ！ちょうちょになったあ。」とどびあがつてよろこびました。先生も「本当に、たん生日に羽化したね。めずらしいこともあるね。」とびつくりしてみえました。

「あれ、あれだけくいしんぼうだったモンちゃんなのに、体が小さいなあ。」
よく見ていると、モンちゃんのせは、私と同じでとても小さいのです。私は、（お兄ちゃんとおばあちゃんのかんがめずらしくあつたなあ）と思いました。でも、（あんなによくキャベツを食べたのに、どうして六月のちようは、こんなに体が小さいのだろう）とふしぎに思いました。理科の時間、そのことについて話し合いました。河村君が「六月にしくしたちようは、五月にくらべて気温が高く、早く羽化してしまつたやろ。それで、キャベツを食べている日が少なく、体が小さくなるんやない。」
と言いました。私は、（気温のちがひによつて、モンちゃんの成長にちがいがでてくるの

うな気がした。私がピエロだということがあ
ばかれてしまったら、きっと皆私から去って
行くだろう、そう思った瞬間、
「どうして」

という、彼女に分かる訳もない質問を浴びせ、
彼女を黙り込ませてしまった私。軽薄な私を
見られるのが嫌で、必死でごまかそうとして
いた。

あの時、彼女はそれ以上何も言わなかった。
けれど、きつと私がピエロだということを確
信しただろう。なぜなら、あれから私と彼女
はもう以前のように話すことが出来なくなっ
ていたからである。

私は寂しかった。嫌われたくなかったから
一生懸命「ピエロ」を演じて来たのに、事実
が分かってしまった途端、友達を失ってしま
うなんて。

友を失った寂しさの中、私は心がキリキリ
と痛むのを感じていた。何か、罪悪感のよう
なものを感じた。どうしてだろう。友達を失
って、悲しいのは私なのに。

彼女はこう思っただろう。あの時の彼女は、
とても悲しそうだ。仲の良い友達の私が
実は嘘だらけのピエロだったなんて。さぞ、
傷ついたことだろう。私の心の痛みは、彼女
の心の痛みなんだ。そう思うと、分までの自
分がとてもみじめに感じられてならなかった。

私は考えた。私の中に欠けていたものは何
だったのだろう。それを考えなければ、もう
生きていけないような気持ちにさえなった。

私は「人気者」でいるために、自分を隠し
偽っていた。それは、実は自分を傷つけ他人

をも傷つけることだったのだ。「人気者」の
座を守るため、自分自身を守るため、ずっと
演じてきたピエロ。その姿は、勇気のない私
の虚像だった。周りの人が見ていたのは、本
当の私ではなく、ただの虚像にすぎなかった。
だから、誰も本当の私の姿を知らないんだと
いう気がして、自分の存在が分からなくなっ
てしまっていたのだ。みんなの前で良い子で
あらうとしすぎたために、ピエロはとても寂
しい思いをしていたのだ。

私の中で欠けていたもの。それは、実際の
自分をさらけ出す勇気だった。それがなかつ
たために、いつまでもピエロの自分にこだわ
り続け、あげくの果てに、友達まで失ってし
まった。

私は今、そのことを教えてくれた友達に、
心から感謝している。もう二度と、ピエロを
演じることはないだろう。ピエロ役はもう引
退だ。これからは、実際の自分を見せていき
たい。それは、時には人との衝突を招くこと
になるかもしれない。けれど、それが正直な
私の姿であるのなら、私は後悔しないだろう。
これまで私を感じてきた、心の底の孤独感
もうなくなってしまうはずだ。そして、私の
心は、充実感でいっぱいになるだろう。また
いつかきつと、本当の親友を得ることもでき
る。

さよなら、私の中のピエロよ。

選評

私ともうひとりの「私」との距離を慎
重にとらえながら、新しい「私」を見つ
け出す過程をみごとに描いた作品です。

負けない文章が、必死に自分を模索
する「私」の戸惑いと決意をととてま
うまく表現しています。



最終審査会。国語部門の審査風景。審査の先生は、右から、岡田純也、漆原智良、亀村五郎、野上眞行、太田昭臣の五先生。